

平成22年度病害虫発生予察特殊報第6号

平成23年3月28日
愛 知 県

1 病害虫名：エゴマ青枯病 (*Ralstonia solanacearum*)

2 対象作物：エゴマ

3 発生地域：東三河地域

4 発生確認の経過

平成20年8月東三河地域で、エゴマが急激に萎れ、枯死する被害を確認した。茎を切断すると維管束が褐変(図1)しており、切断部を水につけると白濁液が漏出した(図2)。維管束の褐変部位から細菌が分離され、愛知県農業総合試験場で*Ralstonia solanacearum*と同定した。

本菌による病害は、ナス科植物の青枯病がよく知られているが、エゴマにおける発生は本邦での初確認である。

5 病徴

発病すると、急激に萎凋し、いわゆる青枯症状を呈して枯死する。摘心、摘葉作業等(病原菌がハサミ等を介し、発病株から健全株へ伝搬)により地上部から感染した場合、作業した畝にそって連続して発病する(図3)。

6 病原菌と伝染

土壌伝染性の病害である。

トマト、ピーマン、ジャガイモ等を侵し、エゴマと同じシソ科ではシソで発生の報告がある。

地温が20℃を超えると発病しはじめ、25～37℃で発病は激しくなる。

病原菌は罹病根、非宿主の根圏および土壌中で生存し、土壌中での生存期間は1～数年であるが、乾燥土壌(土壌水分20%以下)では10日間以上生きることができない。

病原菌は地表下から1m程度まで検出され、病原菌の菌密度が高いのは地表から40cmぐらいまでである。

植物の植え付け後、病原菌は根のまわりで増殖し、主に根の傷口から侵入する。

根の傷口から侵入した病原菌は、茎の導管中で増殖し、植物を萎凋させる。

発病株の根からは、病原菌が排出され、病原菌は水とともに移動し健全株の根に到達、発病の機会を増やす。

健全株と発病株の根が接触して伝染するほか、収穫やせん定等の管理作業で発病株から健全株に伝染する。

7 防除対策

土壌伝染するので、育苗には無病土壌を用いる。

前作に発病を認めたほ場では、太陽熱による土壌消毒を行う。

根が傷まないよう土壌水分の急激な変化、土壌の過湿、過乾燥が無いように適切なほ場管理を行うとともに、根を傷めるセンチュウ等の防除対策を行う。

病原菌は水とともに移動するので、排水対策を行う。

管理作業に用いる刃物は消毒して使用する。

地温を下げる栽培管理を行う。

発病株は、見つけ次第、ほ場外に持ち出し処分する。

8 連絡先

農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除グループ

電話：0561-62-0085(内線471)

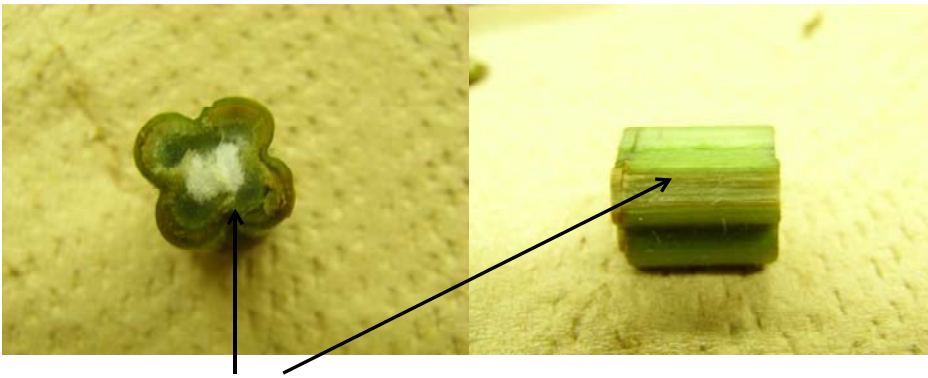


図1 導管の褐変症状

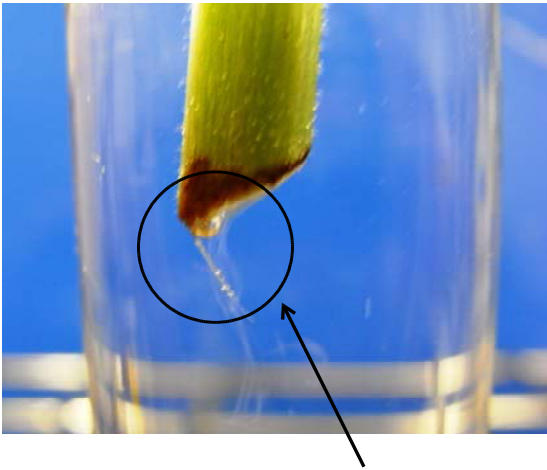


図2 切断部を水につけると白濁液(細菌泥)が漏出



図3 ほ場での発生状況(萎れ、青枯症状)